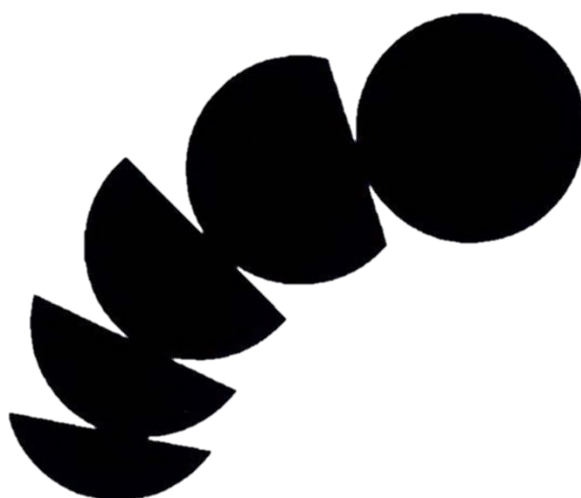


# 第 36 回テニス学会

## The 36th CONFERENCE OF TENNIS SCIENCE

期 日 令和 6 年 6 月 29 日 (土) ~6 月 30 日 (日)  
会 場 明治大学和泉キャンパス



JAPAN SOCIETY  
ON TENNIS SCIENCE

主 催 日本テニス学会  
後 援 明治大学  
協 力 株式会社ダートフィッシュ・ジャパン  
株式会社プレシヤスワーク  
株式会社文成印刷  
(同支援内容内五十音順)

# 大会日程

## 6月28日(金)

---

18:00-19:20 運営委員会 明治大学和泉ラーニングスクエア 2階 LS206

## 6月29日(土)

---

11:30-	受付開始	メディア棟 3階
12:00-12:30	総会	メディア棟 M302
12:50-12:55	開会挨拶	メディア棟 M302
13:00-14:00	一般研究発表(口頭①)	メディア棟 M302
14:15-15:15	特別講演	メディア棟 M302
15:45-16:15	一般研究発表(オンコート)	テニスコート※1
16:30-17:30	ワークショップ(オンコート)	テニスコート※1
18:00-20:00	懇親会	和泉の杜 2階

## 6月30日(日)

---

9:15-	受付開始	メディア棟 3階
9:45-10:45	一般研究発表(口頭②)	メディア棟 M302
11:00-11:25	一般研究発表(ポスター)	メディア棟 M301
11:45-12:50	テニス大会	テニスコート※2
12:50-13:00	表彰式・閉会式	テニスコート

(閉会后 17時まで自由にコートを使用できます)

※1,2 コートサーフェスはハードコート(デコターフ)です。

※1 雨天の場合、一般研究発表(オンコート)、ワークショップ(オンコート)は、和泉総合体育館3階メインホールで行います。

※2 雨天の場合、テニス大会は中止になります。

---

# 目次

明治大学への交通アクセスとキャンパスマップ	2
参加される方へお知らせ	4
発表者の方へのお知らせ	6
大会プログラム	8
学会企画（特別講演・ワークショップ）	11
一般研究発表（口頭・オンコート発表）	14
一般研究発表（ポスター発表）	20
企画プログラム開催履歴	24
テニス大会歴代優勝者	29
研究奨励賞歴代受賞者	32

# 明治大学への交通アクセスとキャンパスマップ

◆住所：〒168-8555 東京都杉並区永福 1-9-1

◆アクセス：京王線／井の頭線 明大前駅（駅番号：K006・IN08）下車徒歩約5分

■京王線 新宿駅から特急・急行・区間急行・快速で2駅（約7分），各駅停車で3駅（約10分）

■都営新宿線（京王新線直通）

[快速（橋本行）] 新宿→笹塚→明大前（新宿から4駅 約10分）

[各駅停車（笹塚行）] 新宿→笹塚（京王線乗り換え）→明大前（新宿から約12分）

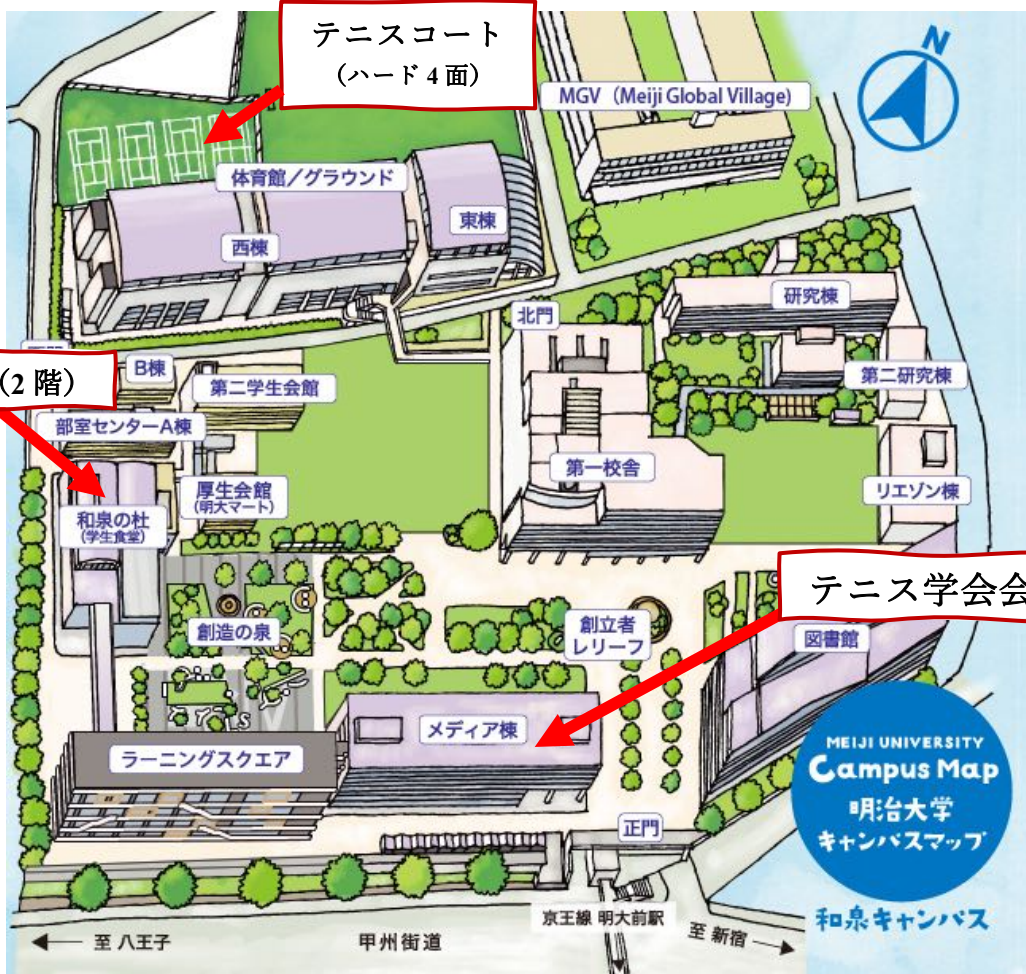
■井の頭線

渋谷から急行2駅目（約7分），各駅停車7駅（約12分）

吉祥寺から急行3駅目（約13分），各駅停車9駅（約17分）



明大前駅からのアクセス



和泉キャンパスマップ

## 参加される方へのお知らせ

### 1. 学会大会参加の申込み

事前申込み制になっていますが、学会大会期間中の当日参加申込みも可能です。懇親会費は学会当日受付でお支払ください。

#### 《学会大会参加費》

事前申込み	正会員:5,000円	学生正会員:2,000円
	非会員:7,000円	非会員学生:5,000円
当日申込み	正会員:6,000円	学生正会員:3,000円
	非会員:8,000円	非会員学生:6,000円

#### 《懇親会・テニス大会参加費》

懇親会(29日18時～, 和泉の杜2階)	3,000円(学生・院生無料) ※当日現金でお支払ください。
テニス大会(小山秀哉杯)参加費	無料

### 2. 受付

大会1日目:6月29日(土) 11:30 受付開始	受付場所 <u>メディア棟3階</u> 学会大会参加(事前申込み, 当日申込み), 懇親会, テニス大会(小山秀哉杯)の受付を行います。
大会2日目:6月30日(日) 9:15 受付開始	

当日参加申込みの方は、受付時に、参加費等のお支払いをお願い致します。当日、日本テニス学会に入会された方は、会員参加費にてご参加いただけます。大会参加事前申込みをされた方は、出席をお届けください。また受付にて全員の方に名札をお渡ししますので、お名前をご記入の上、見やすいところにお付けください。

### 3. テニス大会(小山秀哉杯)

6/30(日)に学会員の交流と親睦を中心としてダブルスを中心にテニス大会を開催します。上位入賞者には景品を用意しております。開始時刻までにテニスコートにお集まりください。テニスコートはアウトドアで、サーフェスはハードコート(デコターフ)です。なお、試合参加中に気分が悪くなった場合は、早急にお近くのスタッフにお伝えください。また、大会中に発生した事故および傷害につきましては自己責任とさせていただきます。休息や水分補給などは各自こまめにお取りください。

**※雨天の場合、テニス大会は中止となります。**

#### 4. 昼食

昼食は各自でご準備ください。

#### 5. 宿泊

宿泊は各自でご予約ください。

#### 6. 公認指導者更新のための研修ポイント

学会に2日間参加されますと日本テニス協会「公認指導者更新のための研修ポイント」が2ポイント付与されます。1日のみの参加はポイントが付与されません。ポイント付与をご希望の方は受付時に「研修・実習活動実績証」(日本テニス協会)カードをご提出ください。カード返却は、提出日の夕方となります。

#### 7. 研究奨励賞

研究奨励賞は、テニス学会において優れた研究発表を行った若手研究者・指導者に、今後さらにその大成を期し、研究・指導振興の一助となることを目的として設置されたものです。選考対象は、第36回テニス学会一般研究発表者のうち、年齢が35歳以下の発表者です。運営委員による選考を行い、受賞者には表彰状と金一封の進呈があります。表彰式で授与を行います。

#### 8. デフテニス選手との交流練習会・エキシビジョンマッチ

2日目学会大会終了後、明治大学体育会硬式庭球部の協力のもと、デフテニス日本代表選手との練習会、エキシビジョンマッチを行います。会員の先生方も来年の東京デフリンピックに向けて、技術・戦術指導などのアドバイスをしていただけると助かります。もちろん、練習や試合の相手をしていただけると尚更助かります。終了時間は17時を予定しています。

<学会大会に関するお問い合わせ>

第36回日本テニス学会大会事務局

明治大学 後藤光将

〒168-8555 杉並区永福1-9-1

TEL:03-5300-1240

E-mail: gotms@meiji.ac.jp

## 発表者の方へのお知らせ

### ◆口頭発表

- ・ 「口頭発表」は、発表 10 分、質疑 5 分の計 15 分をお願いします。進行は座長に一任ください。テニス学会は創立当初から、「現場と研究のギャップを埋める」というコンセプトを掲げてきました。「研究結果を現場で活用できるように心がけよう、提言を行おう」という思いがあったのですが、実際には、「有意差が出なかった」「データ数が少なかった」「ここまで言ったら拡大解釈と言われる恐れがある」等の理由から、現場に向けた具体的なメッセージを発信するには至らないケースも多かったと思います。そこで本大会は、データや事例に直接的に基づく「結果」「考察」とは別に、スライドの最後に「現場への提言」（名称はこの通りでなくても構いません）という 1 枚もしくは数枚を作ってください、「現場でこのように応用できるかもしれない」という発表者の方の思いを自由に発信していただきたいと思います。座長にもあらかじめこの点を理解していただいておりますので、安心して提言を行ってください。実りある学会大会にするためにご協力をお願いいたします。
- ・ 配布資料がある場合は 100 部準備してください。配布資料には、演題名、演者氏名、所属を明記してください。
- ・ 口頭発表では、学会事務局の用意する共用 PC (Windows 11 Education(64bit) Microsoft Office 2021 Professional Plus) での発表、もしくは持込 PC での発表をお選びいただけます。受付時にどちらで発表されるかをお伝えください。

### ✓共用 PC 使用の場合の注意

- ・ 発表セッション開始の 30 分前までに各発表会場にてスライド(Microsoft Office Power Point ファイル) をご提出ください。データの受付作業はスタッフが行います。簡単な修正であればその場での修正が可能です。
- ・ 動画や共用 PC にデフォルトでインストールされていないソフトウェアを使用する場合は持込 PC での発表をおすすめします。
- ・ 発表データを作成する際、使用するフォントは Windows 標準のものをご使用ください。特殊なフォントを使用すると文字ズレやレイアウト崩れの原因となります。
- ・ 動画は発表データと合わせてフォルダにまとめてから Power Point に埋め込みを行ってください。

### ✓持込 PC を使った場合の注意

- ・ 受付時、持込 PC にて発表する旨を受付へお伝えください。
- ・ 持込 PC を使用して発表される場合、パソコンの映像出力端子は HDMI もしくは VGA (15pin) となります。変換ケーブルが必要になる場合は、必要なケーブルをご持参ください。万が一動作しない場合は共用 PC を使用してください。前項目の“共用 PC を使った場合の注意”をご覧ください、共用 PC でも動作可能な準備をお願いします。
- ・ プログラムをご確認いただき、ご自身の前の発表者が発表を始めた段階で持込 PC (必要なケーブルを含む) を会場前方にあります「次演者席」前方の PC ブースにご提出ください。前の発表者の発表が終了した段階でディスプレイ画面の切り替え作業を行います。口頭発表のスムーズな進行にご協力ください。



※ タブレット端末による発表はできません。

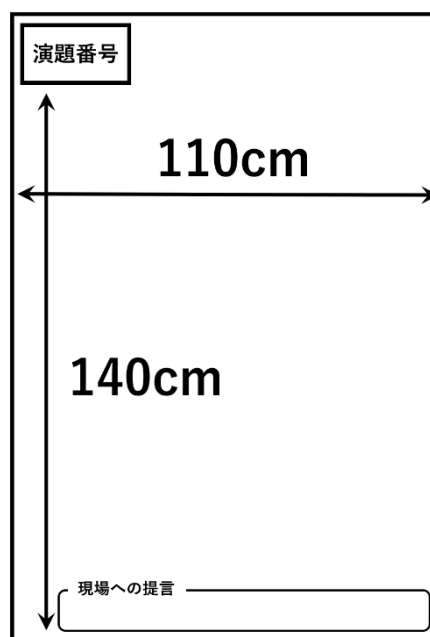
※ 作成いただいたデータは他の PC で読み取れない可能性があります。他の PC でも起動するかどうかをあらかじめご確認ください。

#### ◆オンコート発表

- ・ オンコート発表の発表時間は、発表 10 分、質疑応答 5 分の合計 15 分です。発表時間には準備などが含まれます。また、参加体験型の発表を希望される発表者、およびオーディエンス用にテニスラケットの貸出を行います。参加を希望される方は、オンコート発表会場のスタッフへお申し出ください。ボールは大会事務局で準備します。
- ・ オンコート発表の会場は和泉テニスコート（ハード 4 面）にて実施します。雨天の場合は和泉総合体育館 3 階メインホールで実施しますので、室内シューズを用意ください。

#### ◆ポスター発表

- ・ 本大会ではポスター発表にも座長が 1 人割り当てられ、発表者 1 人に対して発表 3 分、質疑応答 2 分の合計 5 分を準備しています。進行は座長に一任ください。前記「口頭発表」部分に記載しましたように、本大会では研究結果を実践の場に役立てることを重視しておりますので、ポスターの一部にも「現場への提言」を盛り込んでくださいますよう、お願いいたします（右図例を参照ください）。詳しくは前記“口頭発表”欄を参照ください。
- ・ ポスターは 6 月 29 日（土）の 12:00 までに掲示を完了してください。
- ・ ポスター掲示サイズは横 110cm×縦 140cm です。ポスター掲示用のテープは学会が準備します。左上角には大会事務局が用意する演題番号を貼付します。ポスターには、演題名、演者、共同研究者、所属を各自記載してください。
- ・ ポスターは 6 月 30 日（日）の 13:00 までに撤去願います。所定の時間経過後に残されたポスターは、大会事務局にて処分させていただきます。



◎発表時間の厳守にご協力ください。

# 大会プログラム

## 大会前日:6月28日(金)

---

18:00-19:20 運営委員会 明治大学和泉キャンパス 和泉ラーニングスクエア 2階 LS206

## 1日目:6月29日(土)

---

11:30- 受付 学会大会・テニス大会 (場所:メディア棟3階)

12:00-12:30 総会 (場所:メディア棟3階 M302)

司会:宮地 弘太郎 (大阪体育大学)

12:50-12:55 開会式 (場所:メディア棟3階 M302)

会長挨拶 高橋 仁大 (鹿屋体育大学)

皆様へのお願い 後藤 光将 (明治大学・第36回テニス学会大会事務局)

13:00-14:00 一般研究発表 口頭発表① 座長:小屋 菜穂子 (大同大学)

(場所:メディア棟3階 M302)

13:00-13:15 演題番号 1-1 (口頭 1)

「Breakthrough Self-Assessment Worksheet を用いた心理サポート —大学理工系テニス部員に対する実践研究—」

○日置 和暉 (慶應義塾大学) 発田 志音 (東京大学)

13:15-13:30 演題番号 1-2 (口頭 2)

「ソフトテニスの攻撃的なバックハンドスライスショットのラケット動作について」

○松江 拓 (鹿屋体育大学大学院) 前田 明 (鹿屋体育大学)

13:30-13:45 演題番号 1-3 (口頭 3)

「男女エリート車いすテニス選手におけるサーブの重要性について」

○中村 和樹 (びわこ成蹊スポーツ大学) 大澤 啓亮 (鹿屋体育大学)

村上 俊祐 (鹿屋体育大学) 高橋 仁大 (鹿屋体育大学)

13:45-14:00 演題番号 1-4 (口頭 4)

「全豪オープンテニス大会デフテニス部門に帯同して」

○平田 大輔 (専修大学)

14:15-15:15 特別講演 1 (場所:メディア棟3階 M302)

『デフテニスの現状と今後の展望 ～東京 2025 デフリンピックに向けた取り組み～』

講師:森本 尚樹 (一般社団法人日本ろう者テニス協会代表理事)

司会:後藤 光将 (明治大学)

**15:45-16:15 一般研究発表 オンコート発表 座長:宮地弘太郎 (大阪体育大学)**

(場所:和泉テニスコート 雨天の場合, 和泉総合体育館3階メインホール)

15:45-16:00 演題番号1-5 (オンコート1)

「ボレー指導の実践報告と実演」

○服部 保弘 (Kids Tennis Team KICKS) 発田 志音 (東京大学)

日置 和暉 (慶應義塾大学)

16:00-16:15 演題番号1-6 (オンコート2)

「打点の「幅」を広げるトレーニングの提案: “Sitting on a slow ball” 方略に基づいて」

○村上 俊祐 (鹿屋体育大学) 大澤 啓亮 (鹿屋体育大学) 高橋 仁大 (鹿屋体育大学)

**16:30-17:30 ワークショップ (オンコート)**

(場所:和泉テニスコート 雨天の場合, 和泉総合体育館3階メインホール)

『デフテニス体験 ～聴覚障害者へのテニスコーチングを考える～』

講師・協力:一般社団法人日本ろう者テニス協会, NPO 法人デフテニスジャパン

司 会: 板橋 クリストファーマリオ (北里大学)

針ヶ谷 雅子 (明治大学, ろう・難聴児の体験活動を支える会)

**18:00-19:30 懇親会 (場所:和泉の杜2階)**

**2日目:6月30日(日)**

9:15- 受付 学会大会・テニス大会 (場所:メディア棟3階)

**9:45-10:45 一般研究発表 口頭発表② 座長:西村覚 (島根大学)**

(場所:メディア棟3階 M302)

9:45-10:00 【演題番号2-1 (口頭5)】

「ジュニアテニス選手の栄養素摂取量は将来の競技成績を予測するのか?」

○黒田 裕太 (北翔大学) 村上 俊祐 (鹿屋体育大学) 魚田 尚吾 (流通科学大学)

10:00-10:15 【演題番号2-2 (口頭6)】

「AIによるテニスラリーコントロールの映像解析プロとアマチュアの比較」

○橋本 政昭 (橋本総業ホールディングス株式会社) 山田 将大 (株式会社TAFDATA),  
道上 静香 (滋賀大学) 吉田 友佳 (橋本総業ホールディングス株式会社),  
井上 明里 (橋本総業ホールディングス株式会社)

10:15-10:30 【演題番号2-3 (口頭7)】

「下肢パワー発揮能力とストローク動作時の体幹回旋速度およびボール速度の関係性」

○魚田 尚吾 (流通科学大学) 村上 俊祐 (鹿屋体育大学)

10:30-10:45 【演題番号2-4 (口頭8)】

「バイオメカニクスの観点からみたサーブ, 速投, 遠投の相違」

○村田 宗紀 (東洋大学) 村上 俊祐 (鹿屋体育大学)

**11:00-11:25 一般研究発表 ポスター発表 座長:岡村修平 (大阪体育大学)**

(場所:メディア棟 3階 M301)

11:00-11:05 演題番号 P1

「テニスの試合における審判方式の違いがプレーヤーのアウトオブプレーの時間のタイムマネジメントに与える影響」

○松岡 大介 (中京大学) 松本 孝朗 (中京大学)

11:05-10:10 演題番号 P2

「大学女子テニス選手における月経前症状とその対処行動に関する研究」

○丸茂 芙樹 (日本大学) 田島 勇人 (日本大学大学院) 和田 太一 (日本工学院八王子専門学校) 佐久間 智央 (日本大学) 高橋 正則 (日本大学)

11:10-11:15 演題番号 P3

「小型無線多機能センサによるバックハンドのグラウンドストロークにおける頭部の加速度と角速度の波形の特徴の解明」

○岩本 淳 (岩手県立大学)

11:15-11:20 演題番号 P4

「男子プロテニス選手における有効なサーブコースの検討」

○大澤 啓亮 (鹿屋体育大学) 村上 俊祐 (鹿屋体育大学) 高橋 仁大 (鹿屋体育大学)

11:20-11:25 演題番号 P5

「大学生テニス受講者が考える「テニスの良さ」とは? -健康面, 精神面, 社会面に着目して-」

○武田 守弘 (広島文化学園大学)

**11:45-12:50 テニス大会 (場所:和泉テニスコート)**

進行:板橋 クリストファーマリオ (北里大学) ※雨天の場合, 中止.

**12:50-13:00 表彰式・閉会式 (場所:和泉テニスコート)**

司会:後藤 光将 (明治大学)

12:50-12:55 奨励賞・テニス大会入賞者表彰式

12:55-13:00 閉会の挨拶

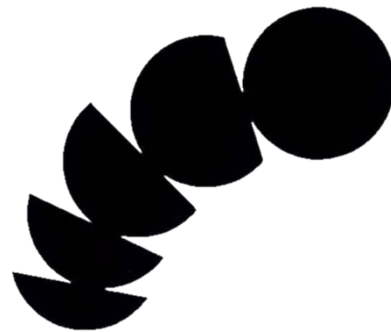
**13:00-17:00 デフテニス選手との交流練習会・エキシビジョンマッチ**

(協力 明治大学体育会硬式庭球部)

※会員のみなさまも是非参加, 指導に加わってください。

学会企画

特別講演



JAPAN SOCIETY  
ON TENNIS SCIENCE

## 特別講演

### デフテニスの現状と今後の展望 ～東京2025デフリンピックに向けた取り組み～

6月29日(土) 14:15-15:15 メディア棟3階 M301

講師: 森本 尚樹 (一般社団法人日本ろう者テニス協会 代表理事)

司会: 後藤 光将 (明治大学)

【概要】2025年11月に日本で初のデフリンピックが東京で開催されます。日本におけるデフテニスの歩み、東京2025デフリンピックに向けた取り組み、その後の展望について、日本ろう者テニス協会の立場から講演いただきます。

#### 講演者 森本 尚樹 氏 プロフィール

1971年6月12日生まれ、長野県松本市出身

小5からソフトテニス、高校からテニス(現在に至る35年)

1989年 京都・花園高等学校 卒業

1991年 京都国際文化専門学校 卒業

(現京都芸術デザイン専門学校)

2002年1月 任意団体『日本ろう者テニス協会』設立  
事務局長、理事長就任

2009年9月 デフリンピック台北 テニス日本代表監督

2017年3月 『一般社団法人日本ろう者テニス協会』法人化  
理事長再任(現在に至る)

2023年9月 世界デフテニス選手権大会スタッフ  
(ギリシャ クレタ島ヘルソニス)

現在 日本テニス協会 多様化テニス委員会委員

テニスの日推進協議会 構成員

東京2025デフリンピック テニス競技運営代表など



日本ろう者テニス協会:<http://www.deafjapan-tennis.com/>

NPO 法人デフテニスジャパン:<https://deaftennisjapan.wixsite.com/deaf-tennis-japan/about-8>

## ワークショップ

### デフテニス体験 ～聴覚障害者へのテニスコーチングを考える～

6月29日（土）16:30-17:30 和泉テニスコート（雨天:和泉総合体育館3階メインホール）

講師・協力: 日本ろう者テニス協会代表理事 森本尚樹・日本代表候補選手・強化育成選手  
司会: 板橋 クリストファーマリオ（北里大学）  
針ヶ谷 雅子（明治大学 ろう・難聴児の体験活動を支える会）

**デフテニスとは**、耳の聞こえない人たちがプレイするテニスです。デフテニスのルールは一般的なテニスと同様ですが、補聴器・人工内耳を外して対戦します。セルフジャッジの試合では、手話サインと呼ばれる手や指で相手にカウントを伝えます。

**デフリンピックとは**、デフ+オリンピックのことです。デフ（DEAF）とは英語で『耳が聞こえない』という意味であり聴覚障がい者の国際的なスポーツ大会です。1985年に国際ろう者スポーツ連盟（CISS）によって創設され、夏季、冬季の2大会があります。デフリンピックは、聴覚障がい者の競技者たちが世界で競い合う世界最高峰のスポーツイベントとして位置づけられています。

**デフテニスの人口は**、極めて少ないです。2022年、男女合わせて約30名しか集まりませんでした。これは特別支援学校（聾学校）にテニス部がほとんど無いことや、子供達がテニスに触れる機会の乏しさが原因と考えられます。テニススクールに通いたいと思っても、コミュニケーションの問題から行きづらい状況にあることも普及を阻んでいます。そこで日本ろう者テニス協会とデフテニスジャパンは、デフテニスの普及と聴覚障がい者への理解を深めることを目的として、1) 耳が聞こえない子供対象のテニス教室の開催、2) 健聴者向けのデフテニス体験、講座などの交流イベントを実施しています。私たちは、多様性を受け入れる社会を作り出すために積極的な取り組みを行っています。

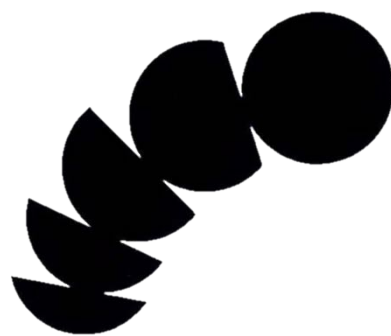
#### **デフテニス選手の悩みとは？**

- ・相手がラケットで球を受ける音が聞こえないので、強い・速い球なのか、弱い・遅い球が来るかを視覚のみで判断するため、次の局面への準備が遅れてしまいます。
- ・審判、相手選手のコールが聞こえません。
- ・アナウンスが聞こえず、急なコート変更やスケジュール変更がわからないことがあります。

**デフテニス体験とは** 耳栓とイヤーマフ（ヘッドホン）を装着して音を遮断することで、聴覚障がい者のテニスを疑似体験することができます。聴覚障がい者がテニスをプレーする時に直面する困難に対する理解を深め、共感する体験機会となります。

# 一般研究発表

口頭・オンコート 発表



JAPAN SOCIETY  
ON TENNIS SCIENCE



13:00-13:15 演題番号 1-1 (口頭 1)

Breakthrough Self-Assessment Worksheet を用いた心理サポート

—大学理工系テニス部員に対する実践研究—

○日置 和暉 (慶應義塾大学) 発田 志音 (東京大学)

筆者らは、テニス競技において「ある時期を境に競技成績が飛躍的に向上する現象」を「ブレイクスルー」と名づけ、それを可能にする要因を探索的に明らかにしてきた(Hioki et al., 2024; 日置ほか, 2023)。そこでは、「高いモチベーションの保持」、「継続的な成長」、「試合での実力発揮」がブレイクスルーにおける重要な要素であることが明らかにされるとともに、それらを実現するために選手が行う具体的な実践が13個のサブカテゴリーとして抽出された。そして、これら13個のサブカテゴリーに対する実践状況の自己評価を5段階で回答し、自身の実践度合いを把握した上で、課題となる項目の得点を高めるための行動目標の設定と振り返りを行うことができる“Breakthrough Self-Assessment Worksheet”を開発した。そして本研究では、第二発表者がコーチを務めるA大学理工系テニス部に所属する10名のテニス部員に対して、本シートを用いた心理サポートプログラムを2ヵ月に1回の頻度で行い、その効果を検討した。具体的には、自己評価の得点の変化や、選手の認識の変化に着目した分析を行うとともに、部員全体として得点が高い項目や低い項目の分析も行った。結果および考察の詳細は当日発表する。

13:15-13:30 演題番号 1-2 (口頭 2)

ソフトテニスの攻撃的なバックハンドスライスショットのラケット動作について

○松江 拓 (鹿屋体育大学大学院) 前田 明 (鹿屋体育大学)

ソフトテニスは回転数の増減でボールの形が変化し、中でも高回転のスライスショットは急激に沈み込むような攻撃的なショットになると報告されている。これはバックハンドショットに攻撃性を付与する方法の一つとして有効であると考えられる。そこで本研究の目的は、攻撃的なバックハンドスライスショットのラケット動作について明らかにすることであった。実験は大学生男子競技者13名を対象とし、攻撃的なスライスショットを含めた3球種の実打テストを行なった。テストは3球種をベースライン付近から指定されたエリアに打球するものとし、試技の際のラケット動作は三次元動作解析システムにて記録した。その結果、球種の打ち分けをする際にはラケットヘッド速度、ラケット面角度、スイング角度、ラケットの傾きが有意に変化していたことが明らかとなった。中でも熟練の競技者は、攻撃的なスライスショットを打つために通常のスライスショットよりも薄いラケット面でボールにコンタクトしていた。加えてより下向きのダウンスイングでボールを「押し込む」アプローチを行っていた。このことから攻撃的なスライスショットはボールコンタクトの難易度が高いことが示唆された。\_\_\_\_\_

13:30-13:45 演題番号 1-3 (口頭 3)

男女エリート車いすテニス選手におけるサーブの重要性について  
○中村 和樹 (びわこ成蹊スポーツ大学) 大澤 啓亮 (鹿屋体育大学)  
村上 俊祐 (鹿屋体育大学) 高橋 仁大 (鹿屋体育大学)

健常者テニスにおいて、サーブのポイント獲得率に影響する要因について多くの研究で報告されている。しかし、車いすテニスにおいては明らかにされていない。そこで、本研究では男子及び女子車いすテニスの試合におけるサーブのポイント獲得率に影響を及ぼす要因について明らかにすることを目的とした。本研究の対象は2024年全豪オープン男女シングルス合計30試合(男子15試合、女子15試合)、3458ポイント(男子1853ポイント、女子1605ポイント)とした。分析の結果、男女ともに1stサーブにおいては、サーブの速度が速くなるほどサーバーのポイント獲得率が高くなった。一方、2ndサーブにおいては、サーブの速度が速くなるほどサーバーのポイント獲得率が低くなった。これは車いすテニス特有のチェアワークが関係していると考えられ、2ndサーブの速度が速すぎるとサーバーが3球目を打球するまでの時間が短くなることが原因だと推察される。この結果は健常者テニスとは異なる傾向を示しており (Mecheri et al., 2016)、車いすテニスの2ndサーブにおいて健常者テニスとは異なる戦略・戦術が求められることが示唆された。

13:45-14:00 演題番号 1-4 (口頭 4)

全豪オープンテニス大会デフテニス部門に帯同して  
○平田 大輔 (専修大学)

全豪オープンテニスは、1月の中旬にオーストラリアのメルボルンで開催されるテニスの四大大会(グランドスラム)一つで、2023年から初めてデフ(覚がい)と知的障がいの各門が全豪オープンに採用されている。「DHoH」はDEAF & HARD OF HEARING(ろうあ、および、難聴)の略で聴覚に障がいを持つテニスプレーヤーによる競技会である。

全豪オープンテニスで、車いすテニス部門が開催されるようになったのは2009年からであるが、聴覚障がい者テニス(デフテニス)の開催は2023年からである。車いすテニスは国際テニス連盟(ITF)の管轄下にあるが、デフテニスを統括するのはICSD(国際ろう者スポーツ委員会)で、これまでのデフテニス最大の大会は4年に一度開催されるデフリンピックであった。2021年ブラジル大会では、日本ろう者テニス協会は日本選手の派遣を見送っている。しかし、2023年9月にギリシャで開催された世界デフテニス選手権の結果により、国際ろう者スポーツ委員会(ICSD)が定めた世界ランキングで、本学体育会テニス部の学生が世界デフテニス選手権で3位となり、全豪オープンテニスから招待された。本発表は、全豪オープンテニス大会の帯同報告と今後に向けての発表を行う。

ボレー指導の実践報告と実演

○服部 保弘 (Kids Tennis Team KICKS) 発田 志音 (東京大学) 日置 和暉 (慶應義塾大学)

前回のテニス学会では「ボレー指導の実践と報告」という題目で口頭発表をした。これまで部活動で高校生の初心者を対象にボレーの指導に当たり、試合でラインアウトやネットを直撃してポイントを失う場面を何度も見てきた。ミスの原因を調べる方策として、身体の動作やラケット操作を再考すると同時に、ラケットでボールを打ち返す動作を物理での力積と運動量の関係から考察してみた。ネット際 1m の高さでボレーをした時、同じ球速でボールを打ち返し、相手コートのベースラインを狙うとすると、水平方向に対して  $2.5^\circ$  下方へ力(力積)を作用しなければならない。ノーバウンドで飛んでくるボールを 11.885m 先へ打ち返そうとすると、初心者に限らずラケットを振ろうとする意識が生まれる。指導として、ボールはラケットでキャッチするイメージ、インパクト時に下半身の並進運動による踏み込みと沈み込み動作によってベースラインへの返球とスライス回転を作り出すことを教え続けた。結果として、ベースラインへ失速せずに低く弾むボールがコンスタントに放たれるようになった。今回はこの指導方法をもとに、オンコートで共同発表者と実演し、皆さんと協議したい。

打点の「幅」を広げるトレーニングの提案：“Sitting on a slow ball” 方略に基づいて

○村上 俊祐 (鹿屋体育大学) 大澤 啓亮 (鹿屋体育大学) 高橋 仁大 (鹿屋体育大学)

野球では一般的に “Sitting on a fast ball” 方略、つまり速球待ちをするよう指導するケースが多く、テニス競技においても同様だろう。一方、“Sitting on a slow ball” という方略、いわゆる遅球待ちをした方が良いという考え方もある。

競技レベルの高い選手が“振り遅れ”と感じるミスは、実際は“振り急ぎ”によるケースが多いと考えられる。相手のボールが深い、自分が大きく動かされた、相手が攻撃的に打球しているであろう動作、打球音、といった相手に攻められている状況に対して、準備局面および加速局面の動作を早めに開始する、あるいは短縮することによって、スイング動作のリズムが乱れ、振り急いでしまう。このタイミング誤差を修正する方法として、“Sitting on a slow ball” 方略に基づくトレーニング法を提案するものである。

【トレーニングの例】

- ・ポジションを前にしたラリーの練習
- ・サーフェスを変化させる (ヨガマット=遅く、プラスチックマット=速く)

詳細な指導内容については、オンコートで発表する。

9:45-10:00 演題番号 2-1（口頭5）

ジュニアテニス選手の栄養素摂取量は将来の競技成績を予測するのか？

○黒田 裕太（北翔大学） 村上 俊祐（鹿屋体育大学） 魚田 尚吾（流通科学大学）

ジュニアテニス選手における身体特性、体力・運動能力および競技成績との関連を検討した研究は、多く存在する。また、テニス競技において選手の実行機能が将来のランキングを予測することを示唆した研究も存在する。しかし、それらの測定項目に加えて栄養素摂取量を含めた検討は少ない。本研究は、ジュニアテニス選手における栄養素摂取量とその後の競技成績との関連に焦点を当て検討することを目的とした。

対象者は、toto 助成事業テニス医科学セミナーにて参加したジュニアテニス選手 37 名（2019 年 U12 カテゴリー）とした。栄養素摂取量は、食物摂取頻度調査を実施し、分析を行なった。競技成績は、日本テニス協会の全国ジュニアランキングの 2023 年 12 月（分析時）分を使用した。

結果は、1 日の総摂取量と全国ジュニアランキングに正の相関関係が認められた ( $r = .53$ ,  $p < .01$ )。

この結果は、早い年齢から、良好な栄養素摂取量を確保することが、将来的に優位な身体特性および体力・運動能力を有することに繋がる可能性を示唆しているのではないかと考える。本研究は、練習以外の行動（トレーニング、ストレッチおよび食事または休養）に目を向ける必要性を示唆するものである。

10:00-10:15 演題番号 2-2（口頭6）

AI によるテニスラリーコントロールの映像解析—プロとアマチュアの比較—

○橋本 政昭（橋本総業ホールディングス株式会社） 山田 将大（株式会社 TAFDATA）  
道上 静香（滋賀大学） 吉田 友佳（橋本総業ホールディングス株式会社）  
井上 明里（橋本総業ホールディングス株式会社）

テニスの試合において、プレースメント精度は勝敗を左右する非常に重要な要素の 1 つである。特に、ラリー中、ベースラインから 1m 以内にテニスボールをコントロールする能力は、試合の成否に大きく影響すると考えられる。本研究では、AI 技術を活用し、このコントロール能力がプレーに及ぼす影響について、映像解析を通じて定量的に評価することを目的とした。プロとアマチュア選手を対象に、ラリー練習からベースライン近辺でのテニスボールの位置を精密に追跡し、それぞれのコントロール力を比較分析した。分析では、AI がテニスボールとテニスコートのベースラインの位置関係を認識し、それぞれのショットでのコントロール精度を計測した。この研究により、プロとアマチュア選手間でのコントロール能力の差異を集めたデータ事例に統計的処理を実施することで明らかにすることを目指した。具体的な分析手法や得られた結果・考察については、発表当日に詳しく述べる予定である。本研究は、テニス指導法の改善や選手のパフォーマンス分析に寄与することを期待している。

10:15-10:30 演題番号 2-3 (口頭 7)

下肢パワー発揮能力とストローク動作時の体幹回旋速度およびボール速度の関係性

○魚田 尚吾 (流通科学大学) , 村上 俊祐 (鹿屋体育大学)

競技パフォーマンスの高い選手はストローク時の体幹回旋速度およびボール速度が高いことが知られている。本研究の目的は、体幹部を回旋させる力学的エネルギーを生む下肢パワー発揮能力と実際のストローク動作時の体幹回旋速度およびボール速度の関係性を明らかにすることであった。24名のジュニア選手がボランティアとして研究に参加した。下肢パワー発揮能力評価として、両脚立ち幅跳び、片脚三段跳び、膝立ちメディシンボール投げの距離と利き手側の片脚切り返し走の時間を計測した。被験者は2つの慣性式9軸モーションセンサ(スポーツセンシング社)を体幹下部と上部に貼付された後、ネット際のSlinger bagからフィードされたボールをベースライン上の腰の高さからクロスコートにあるターゲットに向かって片手フォアハンドストロークを行った。ボールの速度はテニスレーダー(トラックマン社)を使用した。階層式重回帰分析により、ボール速度および体幹回旋速度を下肢パワー発揮能力がどれほど説明できるか統計学的に検証した。その結果、特に減速動作を含む切り返し走の時間が短いほど、体幹回旋速度およびボール速度が高いという関係性が示された。

10:30-10:45 演題番号 2-4 (口頭 8)

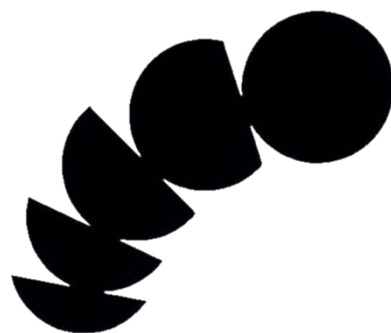
バイオメカニクスの観点からみたサーブ、速投、遠投の相違

○村田 宗紀 (東洋大学) 村上 俊祐 (鹿屋体育大学)

サーブ動作と投動作(速投および遠投)は上肢スウィング動作であり、サーブの技術向上を目的として投動作をトレーニングに採用することがある。しかし、投動作が技術習得に与える影響は統一した見解が得られておらず、その要因の1つはこれらの動作の詳細を比較していないことにある。本研究ではサーブ、速投、遠投についてバイオメカニクスの観点から動作の相違点を明らかにすることを目的とした。大学テニス選手17名にサーブ、速投、遠投を行わせ、モーションキャプチャで測定した動作データから上肢と体幹のKinematicsとKineticsを求めた。その結果、リリースやインパクトに至る過程で肘関節の伸展角速度、肩関節の水平外転および外転角速度などはサーブが両投動作に比べて大きい局面がみられた。一方、リリースおよびインパクト直前に肘関節の伸展角速度、肩関節の外転速度などが大きかった。以上のように、サーブと投動作は同じ上肢スウィング動作に分類されるが、その動作には異なる点が観察された。このことは、ラケットの先端を加速することがボールの加速度は異なり、用具の回転運動を引き起こすことが求められることなどに起因すると推察される。

# 一般研究発表

## ポスター発表



JAPAN SOCIETY  
ON TENNIS SCIENCE

11:00-11:05 演題番号 P1

テニスの試合における審判方式の違いがプレーヤーのアウトオブプレーの  
時間のタイムマネジメントに与える影響

○松岡 大介 (中京大学), 松本 孝朗 (中京大学)

テニスの規則には、ポイント間などに制限時間が定められ、「チェアアンパイア、ラインアンパイア、ボールパーソンがいて試合がおこなわれている」状況を前提にしてつくられている(日本テニス協会, 2015)。本研究は、ボールパーソンがいない大会においても、プレーヤーにアウトオブプレーの時間のルールを順守させ、適切な試合運営を行うために、コート外で試合を審判が管理するセルフジャッジ方式とコート内で常時試合を主審が管理する方式でのアウトオブプレーの時間の比較、分析を行い、アウトオブプレーの時間のルールを守るために有効な審判方法を検討することを目的とした。MUFJ 全国ジュニアテニストーナメントのセルフジャッジで行われた男女シングルス各3試合、主審付きの試合男女シングルス各3試合、計12試合を調査対象とした。試合の映像は、大会主催者に撮影の許可を得て記録を行った。その記録した映像を再生しながら通常主審が試合中に時間計測を行う状況と同様に試合中のポイント間、エンドチェンジ間、第1ゲームエンドチェンジ間、セット間、ゲーム間を、ストップウォッチを使用して手動で計測を行った。結果および考察については、当日発表する。

11:05-11:10 演題番号 P2

大学女子テニス選手における月経前症状とその対処行動に関する研究

○丸茂 芙樹 (日本大学), 田島 勇人 (日本大学大学院)

和田 太一 (日本工学院八王子専門学校), 佐久間 智央 (日本大学), 高橋 正則 (日本大学)

女性アスリートにとって月経前症状への対策は重要な課題である。本研究では、大学女子テニス選手における月経前症状の現状として、その対処行動の内容や課題を明らかにすることを目的とした。ある大学の女子テニス選手16名に対し、PMS(月経前症候群)の疑いを抽出するPMDD評価尺度を含む質問紙を配布し、次の月経前症状が現れた際に直ちに回答するよう指示した。有意差検定は適合度の検定および $\chi^2$ 検定を用い、有意水準は5%未満とした。その結果、PMSの疑いがある者は全16名中6名(37.5%)で、婦人科受診のある者は3名(18.8%)のみであった(いずれも $p < .05$ )。また、PMSの疑いがある者は疑いのない者よりも多く婦人科を受診していた( $p < .05$ )。さらに、PMSの疑いの有無と対策の有無との関係には有意差がなかった。しかし、PMSの疑いがある者だけでなく、PMSの疑いがない者の内省報告をみても、月経前に「集中できない」「イライラする」「身体が思うように動かない」などの回答があった。したがって、大学女子テニス選手においては、PMSの疑いの有無に関わらず月経に関する正しい認識と対処が重要である。 \_\_\_\_\_

小型無線多機能センサによるバックハンドのグラウンドストロークにおける  
頭部の加速度と角速度の波形の特徴の解明

○岩本 淳 (岩手県立大学)

小型無線多機能センサはヒトやモノの動きを計測することを主目的としたセンサであり、振動の計測や動作解析等の実験・各種試験に幅広く使用されている。近年はフォアハンドのグラウンドストロークに関して、体幹の角速度や頭部の加速度・角速度に着目した研究が進んでいる。そして、フォアハンドのグラウンドストロークにおいて、放つボールの回転によって波形の特徴に差異があることが報告されている。一方、バックハンドのグラウンドストロークについての頭部の加速度・角速度の波形の特徴についてはあまり報告が見られない。本報告は、頭部に装着した小型無線多機能センサによってテニスの基礎技術であるバックハンドのグラウンドストロークにおける頭部の加速度と角速度を計測し、その波形の特徴を局面構造であるインパクトを中心に解明した。

男子プロテニス選手における有効なサービスコースの検討

○大澤 啓亮 (鹿屋体育大学), 村上 俊祐 (鹿屋体育大学), 高橋 仁大 (鹿屋体育大学)

テニスの試合では、サーバーの得点率が高いことから、サーバーの優位性が高いことが報告されている。男子テニス選手における1st サービスのポイント獲得率は、約75%と高い割合を示していることから、試合の勝敗に影響を及ぼす重要な技術であると推察される (Mecheri et al., 2016)。先行研究 (Hayes et al., 2018; 佐藤ほか, 2003) による報告では、サービスはボールの速度とコースの2つの要素が重要であると指摘されおり、ポイント獲得とサービス速度との間には高い相関関係性があることが報告されている。しかし、ポイント獲得とサービスコースとの関係性については明らかにされていない。

そこで本研究では、1st サービスにおける着弾位置の分布から確率密度関数を推定し、有効なサービスコースを明らかにすることを目的とした。分析の対象は全豪オープン男子シングルスに出場した右利き選手の1st サービスとした。分析の結果、有効なサービスコースはセンターライン及びサイドラインに近い4つのコースに分類することができた。一方、ボールの深さ (サービスラインからの距離) は各コースによって異なることが明らかになった。



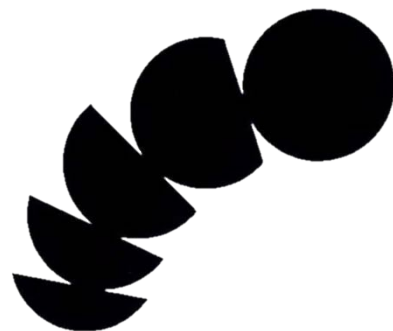
大学生テニス受講者が考える「テニスの良さ」とは？－健康面，精神面，社会面に着目して－  
○武田 守弘（広島文化学園大学）

「テニスの良さ」については，これまでに多くの研究がなされ，様々な角度から検討されてきた．例えば，日本テニス事業協会のHPには，アメリカ合衆国のテニス事業協会が2017年に公開した「テニスの効用トップ10」に関する内容が記載されている．ただし，いずれもテニスに深くかかわる専門家による研究結果や結論等であり，テニスを少し経験した程度の人実際にどのように感じているのかは明らかにされていない．

そこで本研究では，大学におけるテニスの専門的授業を受講し終了した学生331名を対象にアンケート調査を行い(有効回答数290，有効回答率87.6%)，大学生が考える「テニスの良い面・テニスの良さ」について，①健康面（身体面），②頭脳面・精神面，③社会面のそれぞれに対する選択形式および自由記述形式で得られた回答結果をもとに検討することを目的とした．また合わせて，他のスポーツ種目との比較からも「テニスの良さ」について検討した．

結果から，「テニスの良い面・テニスの良さ」と回答した割合は，①健康面（身体面）で98.3%，②頭脳面・精神面で97.9%，③社会面で87.9%であった．自由記述形式の詳細は当日発表する．

# 企画プログラム開催履歴



JAPAN SOCIETY  
ON TENNIS SCIENCE

## 日本テニス学会 企画プログラム開催履歴

第1回テニス研究会（平成元年10月）	東京大学教養学部
●ジュニアのためのトレーニング 山本秀一・栗山節郎・海野孝・笹原英夫・荒井貞光・佐々岡潔	
第2回テニス研究会（平成2年9月）	東京大学教養学部
●メンタル・トレーニングの理論と実際 児玉光雄（テニストレーニング科学センター）西山征（園田学園女子大学）高岡英夫（運動科学研究所） 白山正人（東京大学）	
第3回テニス研究会（平成3年10月）	大阪体育大学
●10年後のテニスの医・科学を考える 小浦猛志（宝塚テニスガーデン）三浦朗（東北大学）根本勇（日本女子体育大学）辻田純三（兵庫医科大学）	
第4回テニス研究会（平成4年9月）	吉田記念テニス研修センター
●一地域における日本テニス研究会を媒介としたある啓蒙活動 司会：三浦朗（東北大学） 塩野谷明（長岡技術科学大学） ●マラソン選手の活躍とトレーニング科学 司会：三浦朗（東北大学） 小林寛道（東京大学）	
第5回テニス研究会（平成5年11月）	大阪体育大学
司会：中山厚生（天理大学） ●テニスにおける思考力と精神力 坂本京一（GTS アカデミー） 佐藤雅幸（専修大学） 中山厚生（天理大学）	
第6回テニス学会；第1回アジアテニス医・科学会議（平成6年9月）	広島経済大学
司会：磨井祥夫（広島大学） ●中華人民共和国における選手育成システム 郭 漢琴（元中国女子テニスチーム監督・深川市テニス協会強化委員長） ●日本テニス選手の育成システム 浅沼道成（岩手大学）	
第7回テニス学会（平成7年12月）	（財）スポーツ医・科学研究所
●最新世界テニス事情	
第8回テニス学会（平成8年11月）	長岡市市民体育館
司会：友末亮三（（財）スポーツ医・科学研究所） ●日本のテニス選手は世界でどこまで通用するか 藤瀬武彦（新潟国際情報大学） 堀内昌一（亜細亜大学） 海野孝（宇都宮大学）	
第9回テニス学会（平成9年11月）	専修大学
司会：佐藤雅幸（専修大学） ●テニス起源論を巡る謎について 稲垣正浩（日本体育大学） ●テニスでメンが食えるか？ 中川智文（テニスクラシック編集部） 丸山薫（JTA ナショナルテニスセンター） 松原雄二（㈱テニスクリエイション） 佐藤雅弘（JAM プランニング）	
第10回テニス学会（平成10年9月）	岩木山総合公園
司会：村松憲（慶應義塾大学） ●テニス学会の将来展望	
第11回テニス学会（平成11年11月）	白百合女子大学
●野球は科学を現場にどう生かしているか 平野裕一（東京大学） ●ジュニア選手がトップを目指すにはどうすればよいか 西野真一（JTA ナショナルトレーニングセンター） 岩月俊二（（財）吉田記念テニス研修センター） 田村信也（ブリヂストンスポーツ）	
第12回テニス学会（平成12年11月）	職業能力開発総合大学校
●リングを利用した動作のアウトプットコントロールとサイバネティックスのトレーニング，など 飯島庸一（S-CHALLENGE Training Program Works） ●研究成果は現場でどう活用されているか 高橋仁大（鹿屋体育大学） 道上静香（筑波大学） 田中伸明（東京電機大学）	
第13回テニス学会（平成13年11月）	石川県こまつドーム
●日本の選手育成システム 梅林薫（大阪体育大学） 田中伸明（東京電機大学） 大島伸洋（トレーニング科学研究所）	
第14回テニス学会（平成14年11月）	東京電機大学
●日本のテニスを考えるー環境，組織，理念，そして指導法についてー 堀内昌一（亜細亜大学）	

<p>第15回テニス学会（平成15年11月） 東京都立短期大学</p> <p>●日本のジュニア選手育成の問題点を探る 宮尾英俊（名古屋高校） 笠原康樹（湘南スポーツセンター）</p>
<p>第16回テニス学会（平成16年10月） 白百合女子大学</p> <p>●強くなりたいあなたに贈る100ぐらいの法則-トレーニング編- 大島伸洋（トレーニング科学研究所）</p>
<p>第17回テニス学会（平成17年9月） リョーコーテニスクラブ</p> <p>●テニスにおける二軸動作について 小田伸午（京都大学）</p>
<p>第18回テニス学会（平成18年10月） 羽鳥湖レジーナの森テニスクラブ</p> <p>●テニスにおけるスポーツ科学の貢献-現場にどのような貢献がなされているか- 岩嶋孝夫（武蔵工業大学） 道上静香（滋賀大学） 平田大輔（専修大学） 吉田友佳（元プロテニスプレイヤー）</p>
<p>第19回テニス学会（平成19年6月），第8回テニスフォーラムとの共催 兵庫医科大学</p> <p>●講演「コーチングを考える -サッカー協会の試みから-」 講師：田嶋幸三氏（財団法人日本サッカー協会専務理事）</p> <p>●「テニスにおけるスポーツ科学の貢献 -その現状と今後に向けて-」 司会：浅沼道成（岩手大学） 井上直子（青山学院大学） 岩嶋孝夫（武蔵工業大学） 道上静香（滋賀大学） 田中伸明（東京電機大学）</p>
<p>第20回テニス学会（平成20年11月） 国立スポーツ科学センター，ナショナルトレーニングセンター</p> <p>第20回記念大会 『今，テニスでできること』</p> <p>●基調講演「生涯スポーツとしてのテニス -そのあるべき姿-」 講師：宮下充正（日本テニス学会会長，東京大学名誉教授）</p> <p>●特別講演「今後スポーツが向き合っていくべきこと」 講師：吉田友佳</p> <p>●「コーチにとって必要な資質とは」 コーディネーター：西村覚（島根大学） 堀場雅彦（ホリバイインターナショナルテニス） 丸山弘道（吉田記念テニス研修センター） 宮地弘太郎（関西国際大学） 浅沼道成（岩手大学）</p> <p>●対談「古武術からの発想：スポーツからロボットまで」 甲野善紀（松聲館） 川副嘉彦（埼玉工業大学）</p> <p>●教育講演「JISSにおけるスポーツ科学的サポート」 講師：平野裕一（国立スポーツ科学センター）</p>
<p>第21回テニス学会（平成21年12月） 那覇レクセンター</p> <p>●講演「沖縄での生涯スポーツとしてのテニスの普及」 講師：宮下充正（日本テニス学会会長，東京大学名誉教授，首都医校校長）</p> <p>●シンポジウム「沖縄から世界へ！」 コーディネーター：高橋正則（日本大学） 玉城智（沖縄県テニス協会副理事長） 小高邦子（沖縄県立首里東校等学校） 小島弘之（テニスカレッジ ミュー） 澁谷隆良（東洋英和女学院大学）</p> <p>●テニスクリニック「沖縄のジュニアを対象とした効果的な指導法」 澁谷隆良（東洋英和女学院大学） 宮地弘太郎（関西国際大学）</p>
<p>第22回テニス学会（平成22年12月） 明治大学和泉キャンパス</p> <p>●講演「画像でたどる日本テニス史」 講師：岡田邦子（財団法人日本テニス協会）</p> <p>●シンポジウム「テニスを科学するとは？」 コーディネーター：高橋仁大（鹿屋体育大学） 前田明（鹿屋体育大学） 関子浩二（筑波大学） 道上静香（滋賀大学）</p>
<p>第23回テニス学会（平成23年12月） 大阪体育大学</p> <p>●講演「50歳からの健康づくり -生き生きと暮らすために-」 講師：宮下 充正（日本テニス学会会長）</p> <p>●シンポジウム「日本のテニスを世界のトップへ！」 コーディネーター：浅沼道成（岩手大学） 沢松奈生子（元プロテニスプレイヤー） 宮地弘太郎（関西国際大学） 金重徹平（Game Changer） 梅林薫（大阪体育大学）</p>
<p>第24回テニス学会（平成24年12月） 島根大学</p> <p>●シンポジウム「テニスを科学するとは？その2」 コーディネーター：高橋仁大（鹿屋体育大学） 三浦朗（県立広島大学） 村松憲（慶應義塾大学） 梅林薫（大阪体育大学）</p>

<p>第25回テニス学会（平成25年12月） 日本大学</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●特別講演「テニスとこころ～11年間のプロ生活で経験したこと～」</li> </ul> <p>講師：中村藍子（元プロテニスプレーヤー）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●シンポジウム「テニスと心理サポート」</li> </ul> <p>関矢寛史（広島大学） 村上貴聡（東京理科大学） 田中伸明（明治大学） 永尾雄一（日本障がい者スポーツ協会）</p>
<p>第26回テニス学会（平成26年12月） 東京理科大学野田キャンパス</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●特別講演「世界で活躍するには！」</li> </ul> <p>講師：遠藤愛（東京経済大学，元プロテニスプレーヤー）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●シンポジウム「テニスとソフトテニスの融合の可能性を探る！」</li> </ul> <p>高橋正則（日本大学） 石井源信（東京工業大学名誉教授） 緒方貴浩（早稲田大学大学院） 武田守弘（福山平成大学）</p>
<p>第27回テニス学会（平成27年12月） 鹿屋体育大学</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●特別講演「『スポーツの実践研究』が市民権を得るためになすべきこと」</li> </ul> <p>講師：山本正嘉（鹿屋体育大学）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●特別講演「鹿屋発！新しいコンセプトの「鹿屋アスリート食堂」の展開」</li> </ul> <p>講師：田畑綾美（株式会社オキス・管理栄養士）</p>
<p>第28回テニス学会（平成28年6月） 岩手大学</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●特別講演「JTA テニス環境等調査から見えてきたこと」</li> </ul> <p>講師：澁谷茂樹（笹川スポーツ財団）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●シンポジウム「日本のテニス環境を考える」</li> </ul> <p>浅沼道成（岩手大学） 西村寛（島根大学） 富岡好平（エストテニスクラブ） 澁谷茂樹（笹川スポーツ財団）</p>
<p>第29回テニス学会（平成29年12月） 慶應義塾大学</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●特別講演「テニスで学ぶ術」</li> </ul> <p>講師：植田 実（日本テニス協会強化本部本部長）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●シンポジウム「データ活用最前線」</li> </ul> <p>三橋大輔（筑波大学） 池田 亮（日本テニス協会強化本部） 坂井利彰（慶應義塾大学） 植田 実（日本テニス協会強化本部本部長）</p>
<p>第30回テニス学会（平成30年6月） 専修大学</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●特別講演「プロ野球で生き抜くために必要な事-Be Ready-」</li> </ul> <p>講師：鈴木尚広（元読売ジャイアンツ・野球解説者）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●シンポジウム「目指すべきよい指導とは？：それぞれの現場のHow to Coach」</li> </ul> <p>伊藤雅充（日本体育大学） 中嶋康博（VIP・TOPインドアテニススクール） 横松尚志（日本テニス協会） 宮地弘太郎（大阪体育大学） 斎田悟司（株式会社シグマックス 2004年アテネパラリンピック金メダル）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●企画セミナー「心理カウンセラーから学ぶ話の聴き方・話し方」</li> </ul> <p>金子玲子（専修大学／大学カウンセラー・臨床心理士）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●オンコートセミナー「ソフトテニス講習会」</li> </ul> <p>篠原秀典（日本体育大学） 小林幸司（ミズノ）</p>
<p>第31回テニス学会（令和元年6月） びわこ成蹊スポーツ大学</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●特別講演「国内国際大会の必要性について」</li> </ul> <p>講師：堀内昌一（亜細亜大学）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●特別講演「日本卓球協会のこれまでの取り組みについて」</li> </ul> <p>講師：前原正浩（公財）日本卓球協会副会長）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●パネルディスカッション「これからのコーチに求められるコーチングスキルについて」</li> </ul> <p>伊藤リナ（公財）日本オリンピック委員会ナショナルコーチアカデミーアシスタントディレクター） 前原正浩（公財）日本卓球協会副会長）</p>
<p>第32回テニス学会（令和2年6月） 北翔大学</p> <p>新型コロナウイルス感染拡大のため中止</p>
<p>第33回テニス学会（令和3年9月） ウェブ開催</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●レクチャー 「映像で見るテニスの歴史」</li> </ul> <p>講師：後藤光将（明治大学）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●シンポジウム 「テニス競技を支えるスポーツ科学」</li> </ul> <p>魚田尚吾（関西大学） 黒田裕太（北翔大学） 高橋正則（日本大学） 進行：村上俊祐（鹿屋体育大学）</p>
<p>第34回テニス学会（令和4年10月） 北翔大学</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●特別講演「これまでのテニス学会とこれから」</li> </ul> <p>講師：梅林薫（大阪体育大学）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●特別講演「テニピンがテニスのミライを創造する」</li> </ul> <p>講師：今井茂樹（山梨学院短期大学）</p>

第35回テニス学会（令和5年12月） 大同大学

●特別講演「テニスの普及・育成に向けた“オール愛知”の取り組み-プレーヤーセンタードの考え方から-」

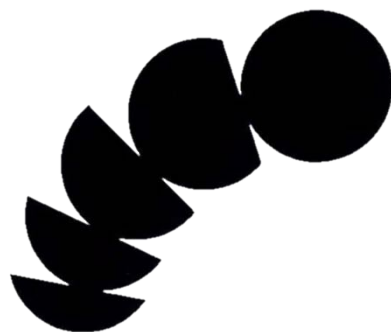
講師：宮尾俊英（名古屋高校，愛知県テニス協会 常務理事）

武田佳久（南山高等学校，愛知県テニス協会ジュニア委員長）

●特別講演「部活動の地域移行とテニス競技の中体連加盟活動」

講師：西村覚（島根大学，日本テニス協会 普及推進副本部長・総務財務副本部長）

# テニス大会歴代優勝者



JAPAN SOCIETY  
ON TENNIS SCIENCE

日本テニス学会 テニス大会 歴代優勝者

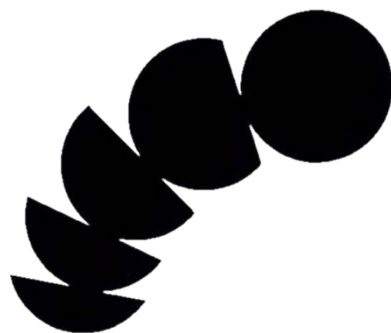
		Aクラス	Bクラス	45歳以上
第1回 1989	東京大学教養学部	大島伸洋 村本茂樹	浅沼道成 久保田秀明	
第2回 1990	東京大学教養学部	大森 豊 大森 肇	風間洋一 一瀬郁夫	
第3回 1991	大阪体育大学	高橋正則 村松 憲	前島芳雄 吉永裕樹	
第4回 1992	吉田記念 テニス研修センター	三浦 朗 前島芳雄	杉山貴義 水落文夫	小山秀哉 藤井恒夫
第5回 1993	大阪体育大学	足立長彦 大島伸洋	山内 武 串間敦朗	深見和男 平田 聰
第6回 1994	広島経済大学	雨天のため中止		
第7回 1995	スポーツ 医・科学研究所	宮尾英俊 佐藤陽治	西本整一 岩垂隆成	川副嘉彦 渡辺保雄
第8回 1996	長岡市市民体育館	村松 憲 康永哲守	平田 聰 平田大輔	小山秀哉 平田 聰
第9回 1997	専修大学	佐藤雅幸 小島京子		
第10回 1998	岩木山 総合公園体育館	藤原昌樹 石光孝次		池田耕吉 斉藤静夫
第11回 1999	白百合女子大学	*		
第12回 2000	職業能力開発 総合大学校	*		
第13回 2001	こまつドーム	*		
第14回 2002	東京電機大学	周東真理 村松 憲	コンソレ 川副嘉彦	
第15回 2003	東京都立短期大学 有明テニスの森公園	水野忠知 鈴木誠		
第16回 2004	白百合女子大学	荒天のため中止		
第17回 2005	リョーコーテニスクラブ	平田 聰 平田大輔		
第18回 2006	羽鳥湖レジーナの森 テニスクラブ	Aクラス 佐藤雅幸 佐藤周平	Bクラス 大山 肇 水野忠知	
第19回 2007	兵庫医科大学	池田耕吉 宮嶋慎治		
第20回 2008	ナショナルトレーニングセンター	チーム対抗戦 星美輝 石井誠 望月賢 池田耕吉 高橋博 川田祐也 森雅子		
第21回 2009	那覇レクセンター	山田龍彦 村上貴聡		

\* は不明



		優勝	準優勝	3位
第22回 2010	明治大学	茨木千恵子	澁谷隆良	
第23回 2011	大阪体育大学	武田守弘	森雅子	霜島広樹
第24回 2012	島根大学	池田耕吉	平田聰	山本浩之 村上俊祐
第25回 2013	日本大学	佐藤茂 関矢寛史	神藤隆志 佐野左近	村上俊祐
第26回 2014	東京理科大学	池田耕吉 村上俊祐	黒田裕太 阪田俊輔	平田聰 高橋仁大
第27回 2015	鹿屋体育大学	粥川捺美	山本浩之	西島吉典
第28回 2016	岩手大学	平田 聰 北崎悦子	村上弘平 吉岡瑠維	
第29回 2017	慶應義塾大学	森嶋 修	北崎悦子	
第30回 2018	専修大学	板橋クリスト ファーマリオ 岩本 淳	村松 憲	
第31回 2019	びわこ成蹊スポーツ大学	西坂正雄 発田志音	箸本涼真 山中千紘	
第32回 2020	北翔大学	新型コロナウイルス感染拡大のため中止		
第33回 2021	Web開催	Web開催によりテニス大会不開催		
第34回 2022	北翔大学 雨天により屋内でのテニピン ダブルスマッチで開催	孫国棟 山中海斗	高橋仁大 セントロウ	
第35回 2023	大同大学	岡村修平 川本裕大	須藤佑介 発田志音	

# 研究奨励賞歴代受賞者



JAPAN SOCIETY  
ON TENNIS SCIENCE

## 日本テニス学会 研究奨励賞 歴代受賞者

第1回 平元/10 東京大学教養学部	三浦 朗 東北大学	テニス選手の位置検出システム
第2回 平成2/09 東京大学教養学部	三宅 真理 大阪教育大学	ジュニアの発育発達とショートテニス
第3回 平成3/10 大阪体育大学	大島 伸洋 中京大学	過去の運動クラブ経験がテニスの技術レベルに及ぼす影響
第4回 平成4/09 吉田記念テニス研修センター	高橋 正則 日本大学大学院	グラウンド・ストロークにおけるコースと球種の予測のための認知的技能について
第5回 平成5/11 大阪体育大学	三橋 大輔 筑波大学	一流テニス選手における大腿筋群の形態的特徴
第6回 平成6/09 広島経済大学 兼 第1回アジアテニス医・科学会議	ANNA.P.SKORODOUMOVA Russian State Academy of the Physical Culture	Loads in Competition
第7回 平成7/12 スポーツ医・科学研究所	田中 伸明 慶應義塾大学	大学テニスプレイヤーの集中力と競技力との関係
第8回 平成8/11 長岡市市民体育館	田辺 智 吉田記念テニス研修センター	テニス・サービスにおける上肢関節運動について
第9回 平成9/11 専修大学	鈴木 隆宏 テニスクリエーション	サービススイングにおける回旋動作へ導入するための練習方法の紹介
第10回 平成10/09 岩木山総合公園	道上 静香 筑波大学	世界一流選手のフォアハンド・ストロークについて -コース打ち分けの技術について-
第11回 平成11/11 白百合女子大学	高橋 仁大 鹿屋体育大学	世界トップ選手のダブルスのゲーム分析
第12回 平成12/11 職業能力開発総合大学校	平田 大輔 日本体育大学	テニスの学習に伴う認知的技能の変容に関する研究 -初心者について-
第13回 平成13/11 こまつドーム	有村 純太郎 鹿屋体育大学大学院	ビデオ機器を導入した練習法の開発
第14回 平成14/11 東京電機大学	武田 守弘 広島大学大学院	テニスのサービス予測に関する調査 -状況に基づく予測に着目して-
第15回 平成15/11 東京都立短期大学 有明テニスの森公園	徳田 寛子 岩手県テニス協会トレーニングセンター	テニスプレイヤーの経験年数と戦績によるフローの感覚差について
第16回 平成16/10 白百合女子大学	受賞資格対象者無	
第17回 平成17/9 リョーコートテニスクラブ	櫻井 真之介 日本大学大学院	コース予測のためのパターン認知のトレーニングがパフォーマンスに与える影響 -ソフトテニスのネットプレーを対象として-
第18回 平成18/10 羽鳥湖高原 レジナの森テニスクラブ	佐藤 周平 東海大学大学院	テニスのサーブにおける模擬動作（フォーム）と実打との比較検討
第19回 平成19/6 兵庫医科大学 兼 第8回テニスフォーラム	宮地 弘太郎 関西国際大学	ラリーの主導権を握るためのショットに関する研究
第20回 平成20/11 国立スポーツ科学センター ナショナルトレーニングセンター	九鬼 まどか 早稲田大学大学院	クロススタンス打法によるフォアハンドストロークのキネマティクス
第21回 平成21/12 那覇レクセンター	岩月 猛泰 日本大学大学院	世界一流選手の対戦におけるサーフェスの違いからみたゲーム分析
第22回 平成22/12 明治大学	該当者無	
第23回 平成23/12 大阪体育大学	霜島 広樹 早稲田大学	テニス参加動機が観戦意図へ与える影響に関する研究
第24回 平成24/12 島根大学	村田 宗紀 筑波大学大学院	硬式テニスサーブにおける肩関節内旋トルクと上腕の角加速度の関係
第25回 平成25/12 日本大学	野田 霞 グリーンヒルズインドアテニススクール	低年齢初心者における異種用具（低反発ボール）を活用した ストローク練習のアイデア -PLAY+STAYへの移行を想定したゴムボールの活用-

第26回 平成26/12 東京理科大学	大塚絵梨奈 筑波大学大学院	テニスサーブにおけるトスに関するバイオメカニクスの研究 ・トスのばらつきに着目して・
第27回 平成27/12 鹿屋体育大学	佐久間智央 九州工業大学大学院	ソフトテニス競技における自己効力感および他者効力感とパフォーマンスの関係
	石原暢 北海道大学大学院	青年テニスプレーヤーにおけるシングルスゲーム前後の認知機能の変化と 競技パフォーマンスの関係
第28回 平成28/6 岩手大学	野沢絵梨 慶応義塾大学大学院	ライフスキルと集団凝集正がテニスの競技力に及ぼす影響 ・大学体育会テニス部員を対象にして・
	黒田裕太 北翔大学	高強度活動後のグラウンドストローク精度の改良を目的とした練習方法の提案
第29回 平成29/12 慶応義塾大学	生関文翔 安田女子短期大学	テニスのリズム系ダンスにおける良い動きの獲得と指導法の共通性について
	北崎悦子 筑波大学大学院	テニスのラリーにおける個人戦術の指導の実践知に関する事例的研究 国際レベルで活躍した元女子テニス選手を指導したコーチの語りを手がかりに
第30回 平成30/6 専修大学	村上俊祐 鹿屋体育大学	日本トップテニス選手のグラウンドストロークにおける打球分析： コースとポジションの違いに着目して
	発田志音 東京大学教育学部付属中等教育学校	テニス審判員の参加動機と満足度に関する調査：活躍頻度向上に関する提言
第31回 令和元/6 びわこ成蹊スポーツ大学	箸本涼真 金沢大学	学校体育・部活動とテニスアカデミーのよりよいつながりを探して： アデレードの事例から学ぶ
	山本衛 東京弁護士会	テニス中の事故に伴う法的責任と現場の対応
第32回 令和2/6 北翔大学	新型コロナウイルス感染拡大のため中止	
第33回 令和3/9 Web開催	田島勇人 日本大学大学院	大学テニス選手の心理的競技能力とコンディショニングに対する意識が スポーツ傷害に与える影響
第34回 令和4/10 北翔大学	川本裕大 東京大学	グラウンドストロークにおいて身体全体を打撃方向に大きく移動させるとい う教示がラケットスピードに与える影響
第35回 令和5/12 大同大学	堀内健太郎 日本体育大学大学院	試合中のサーブ動作の分析にもとづく大学男子選手の技術的課題の抽出
	日置和暉 慶応義塾大学	テニス競技における「ブレイクスルー」を可能にする要因： 全国大会上位進出選手を事例とした質的研究



世界中から支持されているコーチング支援ツール

# ダートフィッシュソリューション



 クラウド共有  
with Dartfish TV

 映像分析  
with Dartfish Software



**無料デモンストレーションのお申込受付中！**

当社担当スタッフがお伺いいたします。  
お気軽にお申し付けください。

TEL 03-5835-5661

E-mail [info.df\\_japan@dartfish.co.jp](mailto:info.df_japan@dartfish.co.jp)

株式会社ダートフィッシュ・ジャパン



# Markerless Motion Capture



## FEATURE

- ◆どんな場所でも
- ◆普段着のまま
- ◆一切のマーキングなし
- ◆ワンクリック操作
- ◆簡単空間校正
- ◆自動AIラベリング
- ◆マルチ被験者識別取得
- ◆複数台同期カメラ
- ◆Qualisysカメラ

### Theia3D[ティア3D]



THEIA社製マーカーレスモーションキャプチャーTheia[ティア]は、マルチビデオを利用した動作分析ソフトウェアです。

Theiaは、その名の通りギリシャ神話において太陽神を産んだ女神ティアのごとく、モーションキャプチャー界に新たな光をもたらすマーカーレス技術を提供します。

### マーカーレス技術



従来のモーションキャプチャーでは、被験者はぴったりした服と、訓練を受けたオペレーターが適用しなければならない多数の反射マーカーを着用する必要があります。

Theiaマーカーレスには一切のマーキングを必要とせず、普段の練習着やユニフォームのまま即座にご利用頂けます。

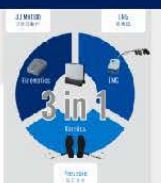
# THEIA

Markerless Motion Capture

## Wireless EMG

# NORAXON

Superior Evidence-Based Biomechanics



### ハードウェア



### ソフトウェア「MR3」



### 小型ワイヤレス・ケーブルレスEMGセンサー



## 中周波 微弱電流治療器

# NEUBOXI

ニューボックスII  
Transcutaneous Electrotherapeutic Stimulator

テニス肘に！



乾式(乾式、3軸加速度センサ)

湿式(湿式、3軸加速度センサ)

[問合せ先] 株式会社プレシャスワーク  
URL: <https://preciouswork.jp>

担当：大井 稔

担当：吉野 智昭


PH:090-6068-7382

PH:090-1330-9420

Email: [ooi@preciouswork.jp](mailto:ooi@preciouswork.jp)

Email: [yoshino@preciouswork.jp](mailto:yoshino@preciouswork.jp)



書籍・学会誌・自分史  カタログ・社内報・伝票

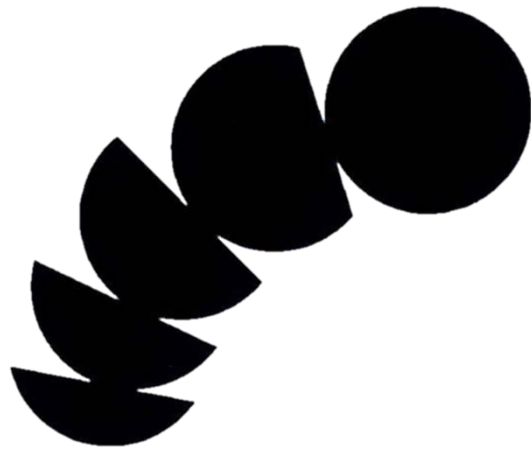
[株]  
**文成印刷**

代表取締役 林 幹雄

東京都杉並区方南1-4-1 ☎ 03-3322-4141 FAX 03-3322-4144

E-mail : [bp@bunsei.com](mailto:bp@bunsei.com)  
URL <http://www.bunsei.com>

MEMO



JAPAN SOCIETY  
ON TENNIS SCIENCE

**第 36 回日本テニス学会大会実行委員会**

**【大会事務局】**

〒168-8555 杉並区永福 1-9-1 明治大学研究棟 110 号室 後藤光将研究室内

委員長	後藤 光将 (明治大学政治経済学部教授)
副委員長	針ヶ谷 雅子 (ろう・難聴児の体験活動を支える会代表, 明治大学兼任講師)
副委員長	板橋 クリストファーマリオ (北里大学一般教育部講師)